

魔王討伐後の恋する乙  
女なアキラ様

クロワッサンチョコ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

web版の魔王討伐後のアクア様です

今まで難攻不落だったアクア様がカズマのハーレム発言に嫉妬するところ最高に可愛いですよね

# 目次

魔王討伐後の恋する乙女なアクア様

1

続・魔王討伐後の恋する乙女なアクア様

31

続々・魔王討伐後の恋する乙女なアクア

47

様



# 魔王討伐後の恋する乙女なアクア様

魔王を倒し、女神としての地位を取り戻した私が『よーし！パパハーレム作っちゃうぞー！』とか馬鹿なことを抜かしたヒキニートを追い出してからもう数日が経った。

「帰ってこないですね……」

「アクア、少しやりすぎじゃないか？」

そして現在、帰ってこないカズマに対しめぐみんとダクネスの二人が心配し始めていた。

「このくらいいしないとカズマさんはわからないのよー！」

そうだ。

この二人はなんだかんだでカズマに甘いのが、あの少し誘惑しただけですぐに陥落する駄目男にはこのくらいのお仕置きをしないとわからないのだ。

「というかどうしてカズマの馬鹿な発言がそんなに気になるんですか？あれはどうみてもいつもの冗談ですよ？」

と、めぐみんがカズマのフォローをし始める。

あの発言が冗談だなんて、そんな事は私でもわかっている。

駄目人間なカズマだが、他人からの好意に関しては確かに誠実なのだ。

しかし

「よくわかんないけど今のカズマさんはムカつくの!」

何故かはわからないのだが、金と名声を手に入れたことよってモテだし、他の女に對して鼻の下を伸ばしたカズマは妙に腹立たしい。

殆ど八つ当たりのようだが、女神である私を怒らせたカズマが悪いのだ。

そんな風に怒る私に對して、めぐみんとダクネスは顔を見合わせて呆れたようにため息をついた

「……アレですな」

「……アレだな」

「何よ!」

この二人は一体何を思っているのだろうか。

すると、ダクネスがとんでもない事を聞いてきた。

「アクアは、カズマのことが好きなのか?」

……………?

「は？何言ってるの？麗しの女神である私がヒキニートなんか惚れるわけないじゃない？」

最近の二人はカズマに毒され始めたと思っていたが、まさかここまで酷かったとは。

この完璧超人で絶世の美女である私があんな冴えない引きこもりに惚れる？

ないない！ゼル帝がドラゴンじゃないくらいありえないんですけど！

「ではカズマが魔王を倒した時、どう思いましたか？」

馬鹿げた問いを一蹴した私に対して、めぐみんが尚も質問をしてくる。

どう思いました？って聞かれても

「……そりゃあ私達のために命まで捨てる覚悟で戦ってくれた事は凄く感謝してるしカズマにしてはカッコよかったと思うけど」

確かに、あの時は、少しだけ、ほんのちよびつとだけ、僅かながらもカズマの事をおかしいと思ってしまうた。

「カズマともう一度この世界で過ごせるって聞いてどう思いました？」

ニヤニヤしながら、更に質問を重ねるめぐみん

「……確かに今までみたい楽しい生活が出来るから嬉しかったけど」

これは当たり前だ。ちなみに別にカズマと一緒にいれるからというわけじゃなくて

二人とも一緒にいれるから嬉しかったわけなんですけどね！

自分でもよくわからないツンデレをし始めた私をよそに、めぐみんは更に更に質問を重ねる。

「じゃあ今まで通り一緒に過ごせるとしても、カズマが私達以外の人と付き合ってるって考えたらどう思いますか？」

この屋敷で四人で一緒にいる。それはいつもと変わらない素晴らしいことだ。

しかし他の人と付き合うとしたら時々屋敷から出て他の女とイチャつきに行くのだろう。

あの男はおだてるとすぐ調子に乗るくらいチョロイのだから、どうせ金に擦り寄ってきた事に気づかずにデレデレするのだろう。

それは……

「そんなの嫌に決まってるじゃない」

「ほう、それはどうしてだ？アクアの望み通り、別にカズマとは一緒に過ごせているじゃないか」

と、ダクネスまでニヤニヤしだした。

嫌な理由なんて……理由なんて……

「それは……そう！私を差し置いて見知らぬ女とイチャつくなんてヒキニートの癖にお



こがましいからよ！」

そうだ。転生の際に自分で選んだ特典を蔑ろにするなんて許されるわけがない。

……あ、でもこの前の特典ではエリスを選んだから、私つてもう特典じゃないんじゃないや

……

い、いやいやいやい！

一度選んだなら最後まで養ってもらわないと！女神は返品不可なんですー！

だからカズマさんは他の女とイチャつくのはダメなんですー！

「ふーん、それなら逆にカズマがアクアに惚れて迫ってきたらどうしますか？」

……えっ

どうしよう、いつものカズマの態度に慣れてしまつて、それは考えた事がなかった。

「えっと……あのカズマさんが？そんなのないない、あるわけないじゃない……」

カズマが私に惚れる……？

でも、仮にそうだったとしたら、この前のハーレム発言なんかも、もしかしたら……

『アクア、ふざけたハーレム発言なんてしてごめん？お前があんまりにも可愛いもんだから少しからかいたくなっちゃってさ。本当はお前のことが大好きだよ』

「……………あう」

……………あ、あれ？結構いいかも……………？

「アクア、もう一度聞きますよ？カズマの事が好きじゃないんですか？」

『アクア、お前は俺のこと好きじゃないのか……………？』

え、ええつと……………私もカズマさんの事が……………。

————ハッ!?

い、いやいやいやいや！待ちなさい私。だってカズマさんよ？あのヒキニートで金に任せた自堕落な生活をするカズマさんよ？セクハラなんて日常茶飯事だしみんなからは鬼畜男なんて呼ばれるほどのクズ人間よ？そんな……………そんな、カズマさんの事が好きかわけ……………

——でも、セレナのせいでアクセルのみんなからハブられてた時はたった一人だけ味方してくれたし

——私の天界に戻りたいってワガママを通すためにお金も全部使って魔王城に攻めてくれたし

——勝てる見込みなんてないのに魔王を倒すために一対一で戦って帰れないことがわかってるのに命まで使ってくれたし

私がどれだけやらかしてもなんやかんやでしょうがねえなあと言いつつ助けてくれるし

……………？

あれ、ひよつとして私ってカズマさんの事が好き……………？

「……………」

「……………」



顔で会えばいいのかわからないんですけど!？」

「思ったよりも重症ですね。……というかもういつそのことカズマにぶつちやけたらどうですか？」

!？」

「ま、待てめぐみん!それはいいのか……? 私達だつてカズマのこと……その……」

「確かに大好きですよ?でも私達はアクアがいない間にキスしたり夜這いかけたり少しずるい事してたじゃないですか」

!?!？」

「それはそうだが……」

?!?!？」

「ねえちよつと待つて!私が家出してる間にそんなことしてたの!？」

そ、そんな……それなら今更私がカズマさんの事を好きになつてももう手遅れなんじゃ……

知らない間にカズマと進展していた二人に気づくのに遅すぎた自分を恨んでいると

「……だから特別です」

「え?」

「今日一日はカズマと二人きりになってくるといいですよ。アクアならカズマのいると

「ころなんて大体わかっているのでしょう？」

めぐみんがおかしな事を言い出した。

「そうだな。最近カズマとアクアはゆつくりと話せていなかったから、二人きりで話し合ってくるという」

ダクネスまで。一体どうしてしまったのだろうか。

これは自分の好きな男が他の女と二人きりになるのを許すということに他ならないと知っているのだろうか。

「そ、そんなこと……二人の気持ちを知ってるのにそんな事するなんて……」

いくらカズマの事を好きになつたからって、私には二人を裏切る事なんて……

「おや？何を言ってるんですか？別に今日一日カズマと二人きりになれると言っただけでカズマを渡すとは言ってますよ？」

は？

「そうだな。それに、たった一日でアクアが私達と同じところまで来れるとは思わないしな」

あ？

「見てくださいダクネス！どうやらこの子はぼつと出の癖に私達に勝てると思ひこんで

ますよー！」

「本当だな！どうやらアクアは余程自分に自信があるらしいな！」

「……上等よ！やってやろうじゃないの！明日の朝になつて泣いて『ごめんなさいアクア様！カズマを返して下さい』なんて謝つても知らないからね！まあ流石にカズマさんが迫つてきても慈悲深い私は二人のためにキス止まりにしといてあげるわ！」

「ほう！じゃあ行つてくるといいですよ。まあカズマの事は最後に私のところに帰つてくると信じているのでまったく心配ありませんがね！ちなみに魔王を倒したら凄いことをすると約束もしましたしね！」

「あつ！その約束を持ち出すのはずるいぞめぐみん！」

喧嘩をし始めた仲のいい二人を横目に、私は屋敷から飛び出した。

「待つてなさいよ！私の女神としての魅力でヒキニートなんてすぐおとしてやるんだから！」



この世界を支配せんと目論む魔王を倒し、数日が経つ。

調子に乗ったハーレム発言のせいで屋敷から追い出され、今までエリス様のところに行っていた俺は、再びアクセルの街へと戻ってきていた。

「しっかし俺も有名になったもんだなあ……」

魔王を倒した冒険者、ということで一躍有名になった俺は、夜中であろうがどこをほつつき歩いていても声をかけられるほどの有名人になっていた。

そのため、現在俺は大通りを通るのをやめ、裏路地を歩いていた。

最近の色んなやつに絡まれては飲んで飲まれての繰り返しのため、流石に疲れているのだ。

：よし、このまま帰ってアイツらの相手をするのも面倒臭いし、今日は久しぶりにあの場所です寝ることにしようか。

そう、馬小屋だ。

寝心地は決して良くないが、目立つこともなく、静かに寝れる場所。まさか、魔王を倒した勇者が馬小屋で寝ているなど誰も思うまい。

馬小屋につき、しっかりとシーツを準備し、布団を掛け、準備完了。藁を敷き詰めた簡易ベッドに飛び込むと、今までの疲れがドンとのしかかってくる。

そのまま睡魔に任せて昼まで爆睡を決め込もうとしたその時、入口から一人の気配を感じた。



「……もう夜遅いつてのに一体誰だよ……」

と、入口を覗き込むと、なんとそこに立っていたのはアクアだった。

……うわあめんどくせえのが来たな。さっさと寝るか

「あー！カズマさん！」

が、変なところで勘のいい駄女神は、そそくさと寝ようとした俺に気づいて一目散にかけてきた。

「……なんだよ、今ごろ迎えか？今日はもう遅いし屋敷には明日帰るよ、んじゃ」

眠かった俺は追い払おうと先手を打って答えるが、アクアは俺の声に耳を貸さず、それどころか俺の布団の反対側に潜り込んできた。

「何のつもりだ？嫌がらせか？悪いけど今は付き合う体力とか残ってないぞ」

「…邪魔なんてしないわよ。ねえ、私も隣で寝ていい？」

「……まあ、別にいいけど」

特に断る理由もなかったため、そのまま中に入れて、俺は反対側を向いて寝始めた。

——そうして寝始めようとしたのだが、先程アクアと話したせいで少し目が覚めてしまっていた。

寝られずにいると、ふと、アクアが声をかけてきた。

「そういえばこうやって二人きりになるのは久しぶりよね」

「……そうだな」

最近は一気に色んなことがあった。

王都でアイリスとの暮らしやセレナの襲撃に魔王との戦い。

確かに、よく考えてみると、アクアと一緒にいられた時間は殆どなかった気がする。

「ねえ、カズマさん」

「なんだ？」

「もう、ハーレム作っちゃうとか言わない？」

またそれか。

めぐみんやダクネスならともかく、なんでアクアがそんなに気にするのか。

まあ、この際ちやんと冗談だって伝えておいた方がいいか。

「冗談だよ。俺だつて好意を寄せてくれてるめぐみんやダクネスを蔑ろにするハーレムを作るほどのクズじゃないからな」

前にもダクネスにも言ったことがあるが、他人から向けられる好意には責任を持つこと。俺は一応そこらへんはしつかりしようと思っかけている。

と、説明する俺にアクアが質問を重ねてくる。

「じゃあ私は？」

「いやお前はヒロイン枠じゃなくてペット枠だろ」

それをハッキリと告げると、アクアは怒りながら俺に掴みかかって……

掴みかかってこない。

あ、あれ？

もしかして、コイツ傷ついてる？

「えっと！いや、その、ほら、お前は家族みたいな感じだから好意っていうかそんな感じじゃなくてさ……」

予想と違った反応に、俺は言い訳を始めながら振り向いてアクアの方を見る。

と、向き合った事でお互いの顔を見ているにも関わらず、俺の言葉を無視して真剣な

顔でアクアは

「ぎゅってしていい?」

と言ってきた。

いや、どうした? こいつ酒でも盗まれたのか?

まあ、寒いし別に拒否する理由もなかったので抱きつく分には構わないが

もぞもぞと抱きついてくる普段とは全く違う態度のアクアに、俺の頭は混乱していた。

……よくよく考えてみたら魔王を倒してからアクアの様子がおかしい

こいつ偽物か? 俺は偽物拾っちゃまったのか? 魔王討伐の報酬にエリス様選んじやつたから金の斧と銀の斧みたいな感じで綺麗なアクアでも連れてきちゃったのか?

「今日めぐみんとダクネスに言われてやってきたの。カズマさんにキチンと言ってこいって」

俺の胸に顔をうずめながら、アクアはそんな事を言い出した。

二人はアクアに伝言でも頼んだのか? もしかして二人は顔も見たくない程に怒っているのだろうか。

これは屋敷に帰ってからそこそこ本気で謝らないといけないな

と、覚悟を決めていると、アクアの口から出てきたのはまったく予想外の言葉だった。

「……カズマの事が好き」

……は？

「カズマを追い出してからずっとモヤモヤしてた気持ちだが、二人に言われてやっと気づいたの」

そう言いながら、背中に回した手の力を強めてくるアクア。

「……やっぱり、カズマさんは私のことを恋愛対象としては見れない？」

え、は？いや、何言ってるの？ちよつと待てよ!?好き?俺のことが?誰が?あのアクアが!!?!?

いやいや冗談に決まってるだろ、落ち着け。ここで俺が本気になつたら実は罠で、『カズマさんたら本気にしちやつて超ウケるんですケドー』とか言つちやうに違いない  
そう、これはいつもの通りからかわれているんだ。

どうにも俺は雰囲気に流されやすい傾向があるらしい。

雰囲気で判断しちやダメだ。

そもそもアクアを恋愛対象として見る要素があるか考える。いや、ないだろ?

顔はいいがアホで酒が大好きな中身おっさんな女神だ。どこかに一緒に行けばアクシデントを持ち込んできて、どこかにほっぽり出したら借金をこきえてきて、でもなんだかんだで困ってる時は助けたくなるし俺が追い詰められた時は助けしてくれるし一番落ち着くし

セレナのせいでアクセルの皆からハブられていた時には本気で復讐しようと思ったくらい大切だし、あそこまで嫌がっていた魔王討伐もきっかけはアクアだし、最後の笑顔には不覚にも少しドキツとしてしまったしってまでまで待て待て。なんでそつちの方向にいつてんだよ。よく考えろよ。アクアだぞ?あのアクアだぞ?

………。

……と、とりあえずアクアの事をどう思うかは置いてまずは罨かどうか確かめな  
いとな

身を削る戦法になるが、少しカマかけてみるか

「お前ヒキニートとか言ってた男に好きとか言っちゃっていいのかよ。一応言っとくが  
俺はクズマさんだよ？アクセルの鬼畜男とか呼ばれてるカスマさんだよ？なんなら試  
しに好きになったところの一つでも言っでご覧よ、言えないだろ？ん？」

自分で言っけて悲しくなってきた。

何でこんなこと言わなくちやならんのだ。

まあいい、どうせアクアの事だし俺のいいところなんて一つも見つけられず、苦し紛  
れに『資産！』とか舐めたこと抜かす姿が目には浮かぶ。

と、そんな事を考えていると、アクアは胸に埋めていた顔をあげ、うつすらと頬を染  
めながら、恥ずかしげに俺を見つめてこう言った。

「………私のために命を張ってまで魔王を倒してくれるところ」

えっ何これガチなやつじゃん。

ていうか何コイツめっちゃかわいい。ウチの女神クツソかわいいわ

……いやいや待てよ！アクアだぞ？あのイロモノ杵やペット杵のアクアだぞ？

予想と全く違う答えに困惑している俺に構わず、アクアは更に続ける。

「私のことを適当に扱ってても、本当は優しくて最後にいつも助けしてくれる、そんなところが大好きよ」

誰だよアクアのことイロモノ杵とかペット杵とか言ったヤツ。どうみてもメインヒロインじゃねえか。頭湧いてんのか。覚えたての爆裂魔法かましてやろうか。

……すいません俺です！すいません！

いやでもおかしいだろ！なんで今日のコイツはこんなに可愛いんだよ！



そうして頭を抱えながら葛藤する俺を見ながら、アクアは不安そうに上目遣いで聞いてきた。

「やっぱり、カズマさんは私のことはヒロインとしては見れませんか？」

ヒロインとして見れないかとかそんなの当たり前のこと………

『……………私、この街にいらぬプリーストですか？』

当たり前のこと………

『ありがとうね』

……………いや、

「そんなことは無い」

肯定することを予想してたのか、俺の答えに驚いて目を丸くするアクアに向けて、俺は言葉を続けた。

「俺は……………さっき言った事と同じように、お前のことを、家族に近い存在だっつと考

えている」

「うん」

確かに、これだけは何があらうと変わることは無い気持ちだろう。

しかし、

「その気持ちは今でも変わらない。何かあった時に、一番安心できる存在なのは変わらないけど……その……よく考えたら、最近のお前に対してはそれ以外の気持ちも混じって……今は、すっげえ、かわいい……とか、そうも思ったりする」

「……………は、はい」

そう、今までと少し違ってアクアを家族とは別に見ている自分がいる。

セレナに復讐すると決めた時からだろうか？それとも魔王を倒すと決めた時だろうか？いつだったかはわからない

わからないが自分でも気づかないうちにいつも以上にアクアの事を大切にしようとする自分がいたのだ。

俺の言葉に照れたのか、テンパって目をキョロキョロさせながらアクアも俺の事を褒めてきた。

「わ、私もカズマさんってこうして見るとカッコいいと思うし……触ってみると冒険者として鍛えあげられた体はとても素敵だと思うわ……」

「お、俺もアクアに抱きつかれたことは何回もあるのにこうして改めて抱き合うとやっぱり抜群のプロポーションしてますね！……なんて、お、思います……っ」

「あ、あははは！カズマさんたら、やっと私の魅力に気づいたのね！ふ、ふーん！私に触れられる事がどれほど幸せなことかやつとわかったようで、な、何よりだわ！」

「ふ、ふふ！お、お前こそようやく俺の溢れ出るカツコよさに気づいたのか！い、今まで勿体ない時間を過ごしたな！」

「あはははは！」

「ふふふふふふ！」

いや何これ恥ずかしいいいいい！！！！

馬小屋で抱き合いながら、二人で好きな所を言い合う？

これなんて罰ゲーム？

しかも今夜は月明かりが綺麗なせいでさつきからお互いの表情が丸見えなんですけど！

月に照らされたアクアの耳は真っ赤で、今すぐにもからかってやりたいところだが、残念ながら俺の耳も真っ赤なのだから笑えない。

ど、どうしよう。これどうしたらいいの？教えて！エリス様！童貞の僕にはこの状態

から何をすればいいのかわかりません！

「……あつ、あのねっ……カズマ……っ」

そうやって神様とイチャつくために神様に救いを求めるという天罰のくだりそんなことをやっている、アクアが今まで以上に顔を真っ赤にしながら小声で囁きかけてきた

「……めぐみんやダクネスにしたように、私にも、その……ちゅーして欲しいの……」

俺は本日付けでアクシズ教に入信する事になりました。

えーっと？アクシズ教の教えは何してもOKなんだっけ？

なら神様とキスするくらい全然大丈夫だよ

それが御神体だったとしても全然大丈夫だよ

ほら、なんの問題もない

てかもうそんなのどうだっていいわ

問題があるうがなろうがキスするなんて俺の自由だ邪魔すんな

「よ、よし……アクア……じゃあちよつと目え瞑れ」

「うん……」

目を瞑ったアクアも綺麗だなど思いつつ、俺は透き通るような長い髪の毛を背中に流しながら唇を近づけ

「……んっ」

人生で三度目となるキスをした。

唇を重ねながら、ぼーっとした頭の中、キスは何度しても不思議な味だなあなんて失礼な感想を思い浮かべている間に、お互いの唇は離れていた。

上気した顔を見合わせ、少し間を置いてアクアは再び俺の胸に顔をうずめ、嬉しそうに聞いてくる。

「……私もようやくめぐみんやダクネスと一緒にスタートラインに立てた？」

チキシヨウ！コイツ可愛いなあ！

ああ、もう我慢出来ねえ！

さあ！キスはすんだ！ならキスの次は何か！そんなこと言わなくてもわかるだろ！

俺は、アクアの腰に手を回し——

「あ、ここから先はお預けだからね」

えっ。

「めぐみんとダクネスに約束したものだ。二人がいない間にズルはしないって……ち、ちよつとカズマさん！そんなに泣きそうな顔しないで！ほら、ぎゅーつてしてあげるから！」

くっそおおおおおお！！！！

いつもこれだ！毎回お預けだ！！何が幸運値だ！！

まあギユツとされてアクアの胸の感触を堪能できてるからいいんですけどね！いやよくねえよ！

「あ、アクアさん……その……そこをなんとかありませんかね……？」

「ダメよ。わざわざ二人きりにしてくれためぐみんとダクネスに顔向け出来ないじゃないかな」

ですよ。

まあ、アクアとこうやって普通に抱き合いながら寝るのも悪くない。

やっぱりオークに襲われた時もそうだったがこいつが一番安心感があるのだ。

「………そういえば、この世界に来てから暫くはずっとこうして二人で寝てたな」

「今みたいに抱きついてたわけじゃないけど、そうね。ここに来て初めての頃はここで寝たり、私がバナナを消したりカズマが秋刀魚を畑から採ったり、色々あったわね」

まったく知らない新天地で一から暮らす。

普通なら耐えられないことだ。ましてや元々二ト気質だった俺は、一人で生きていくことなど不可能だっただろう。

だが、そんな中で明るいコイツがいたから。どれだけアホでどれだけ運が悪くても、唯一の居場所があったから俺は今こうしてここにいれるのだ。

「……そして今はタイマンで魔王を倒した勇者カズマか……人生つてのはわからないもんだな……」

そうして魔王との戦いを思い出し、感慨深く呟くと

「……ちよつと何言つてんの？タイマン？私が弱体化したり蘇生してあげたおかげでしょ？カズマさんは速攻でアンデットに首チョンパされてたじゃない」

……何言い出してんのかな？この子は

「は？何言つてんの？しつかりとタイマンで俺が爆裂魔法で道連れにしたからな？俺の手柄だからな？テレポートで飛ばしてからが計測スタートだからな？」

「残念でしたーテレポート出来たのは私が魔王の魔法耐性を弱化したおかげでしたー！なのでカズマのそれは私の手柄なんですー！」



「……………」

「ちよつと表出るやこの駄女神！人が甘い顔したらすぐ調子に乗りやがって！魔王を倒した最強のカズマ様の力見してやんよ！」

「ブークスクス！この人つたら自分で最強とか言い出したんですけどー！支援魔法のかかってないカズマのステータスでは私に勝てるわけがない事もわからないんですかー！」

ついに耐えきれなくなり、お互いに立ち上がって戦闘態勢に移行する。

今こそ、エリス様のところに行っている間に考えた秘策を使う時——。

「おい、うるせーぞ！静かに寝ろ！」

「すいません！」

騒がしくなったところを隣の利用者に注意され、再び大人しく寝る俺らだった。

やはり俺たち二人には甘酸っぱい雰囲気よりこちらの方が似合うらしい

「カズマさんカズマさん」

と、眠りにつこうとした俺の袖をアクアが引つ張ってくる

「……………なんだ？」

「——また今度、一緒にここに来ましようね！」

「……………しょうがねえなあ！」

## 続・魔王討伐後の恋する乙女なアクア様

「ん……もう朝か……」

小屋の隙間から入ってくる陽光に目を焼かれ、目を覚ます。

「……あ？」

そして、眠い目を擦りながらも体を起こそうとするが、自分の腕の中にいる存在に気づき起きるのを中断した。

「んふ……かじゅまあ……」

今、俺の腕の中には、アクアが眠っている。

しがみつきながら寝ているアクアの顔は、アホみたいにしか見えなかった今までと違い、あんな事があつた今は艶っぽく見えるから不思議なものだ。

そうか、昨日のアレは、夢じゃなかったんだな……

『カズマの事が好き』

俺、コイツと本当にキスを……

「……っ！」

やばい。思い出したらものすごく恥ずかしくなってきた。

……というかよく考えたら抱き合って寝てる今の状態もだいぶヤバくないか……？  
全身に伝わってくる柔らかな感触がものすごく理性を刺激してくるんだが……

もう一度アクアの顔を見る。

やはり、いつ見ても人間離れした美しさを誇る、綺麗な顔だ。

そして今はそれに加えてなんだかダメな性格の方も可愛く思えてきて……

これ、もう一回キスしちゃってもいいよね？

うん、これは正直仕方ないな。俺は男だもんな。目の前で無防備に寝られるとこうしたくなるのは至って当たり前のことだ。むしろしない方がおかしい。

俺は悪くない悪くない。

俺は、眠っているアクアに吸い寄せられるように顔を近づけて、唇を奪おうと――

「…………ふあ…………カズマさんおはよ…………う？」

あ。

やべえ、起きちゃった。

「……………」

これ、この後どうなるか俺にはわかるぞ

恥ずかしさに耐えきれなくなったヒロインに殴られる。

ラノベとかによくあるパターンだ。

ヒロインの寝込みを襲おうとした主人公が暴力を受けずに生還できた事などほとんどない。

「い、いや違うんだアクア！これは……………」

ダメもとながら必死に言い訳をする俺に、アクアが殴りかかって…………

殴りかかって…………？

こない。

恐る恐る目を開けてアクアを見ると、そこにはゆでダコのように真っ赤になったアクアがいて





と、そんな予想していると、アクアがいきなり話題を変えてきた。

「それよりもってなんだよ。これは結構重要な……」

「手、繋いでいい？」

「……お、おう」

そう言つて指を絡めてくるアクア。

当然街中なので人目につき、顔見知り達が「あらあら」といった視線を向けてくる。

は、恥ずかしい……

が、当のアクアはそんなのを気にせずとニマニマとにやけている。

チキシヨウ、本当にどうしやがったんだコイツは。

なんでこんなに可愛いんだよ。

まあ、俺だつて嫌じゃないし、ここでは流石にイチャつけないけれどもウイズの店についたら昨日みたいに甘やかせてやらんことも……

そんな事を考えながら、いつの間にかついたウイズの店に入るために、ドアを開けると



「へいらつしやい！最近なんちやつて紅魔族となんちやつてクルセイダーに飽き足らず、なんちやつて女神にまでデレ始めた男よ！久しぶりであるな！」

### 前言撤回。

コイツの前では絶対にイチヤツかん。

「あら、カズマさん。お久しぶりですね。今日はどうなさったんですか？」

バニルの前で意思を固めていると、店の奥からウイズが出てきた。

「おう、久しぶり！いやあ、ウイズの店のマナタイトが大いに役立ったからさ、感謝を言いに来たんだよ」

「わざわざありがとうございます。お役に立てて何よりですよ」

そういつてニツコリと笑うウイズ。やっぱりウイズは癒しだ……

それに比べて……

「フハハハハ！また来たのか邪魔な女神よ！魔王を倒した後に大人しく天界に戻ってい

ればよかったものを、わざわざ吾輩の前に戻ってくるとは、どこぞの変態貴族令嬢の様な性癖でも持っているのか？」

「はあ？ アンタ何自分に会うために残ったとか勘違いしちゃってるわけ？ 私がアンタみたいな木っ端悪魔のために残るとかありえないんですけど！ それにここに来たのはウイズに会うためなんですけど！ アンタはいらないからサッサと消えて欲しいんですけどー！」

「……いつら……」

「ほう！ それなら消してみるがよい！ 魔王の城に一人で向かった挙句何も出来ずに保護者に助けてもらった分際によく偉そうにそんな事が言えたものだな！ 魔王のやつも貴様のような輩ではなくこの男に倒されて心底安心したろうに！」

「なんですって！ 今までは仮にも悪魔なアンタには多少手こずるから適当に相手してあげてたけど、女神として力を取り戻した今の私が本気を出したらアンタなんて瞬殺よ瞬殺！」

「……やっぱりこいつらがいるときっぱり話が進まねえ！」

「おい、アクア。その辺にしとけよ。バニルとも話したい事があるんだからな」

「ダメよ、この木っ端悪魔とは決着をつけないとダメなの。今日こそはカズマさんに迷

惑をかけるこの存在を消さないと気が済まない！」

お前の方が散々迷惑かけてるからなとツツコみたいところだが、既に臨戦態勢に入つたアクアの耳には届きそうにない。

「私という存在をコケにした事を、地獄の底で懺悔なさい！『セイクリッド・ターン』」

「吾輩を消すと貴様の愛してやまないこの男が悲しむがそれでもよろしいか？」

「ひあ!？」

ちようど消し去ろうと呪文を唱えかけた瞬間、バニルの言葉を受けて固まるアクア。

「……は、はあ？アンタ何言つてんの？私がカズマさんの事、す、好きだなんて適当なホラ吹かないで欲しいんですけど！大体アンタ私のこと見通せない癖に分かつたような口聞いてんじやないわよ！」

「フハハハハ！やはりこの駄女神は馬鹿であるな！ここに来た時からアレだけこの男をチラチラと伺っていたのをこの聡い吾輩が解らぬと思つていいのか？今の腑抜けた貴様など見通す力を使わなくてもバレバレである！そうだな、貴様の朱に染まつた顔からして昨日の夜」

「わああああ!!!やめて!!!言わないで!!!今日のところは引き分けにしといてあげるから!!!言わないで!!!」

バレてたのか。

まあ確かにずっと俺の方をチラチラ見てたのには気づいてたけどな。

「ねえウイズ！とめてとめて！あの悪魔とめて！これ以上言われると恥ずかしくてどうにかなっちやいそうだからとめてえええ!!!」

意地悪な悪魔に言っても無駄だと気づいたのか、今度はウイズに頼り出した。

リッチーに泣きつく女神とは。

そんなアクアをウイズは優しく励ました。

「大丈夫ですよ、アクア様。私、カズマさんの事を好きになるのはとても素晴らしい事だと思います！いつもとは違って椅子に座らずにずっとカズマさんの傍を離れなかったのはそういう事だったんですね！それにバニルさんにかかわれて恥ずかしがるアクア様もとても可愛らしいと私は思い」

「わあああああああ!!!ウイズのバカあああああ!!!」

「アクア様ー!!!」

ウイズの天然な追い撃ちに耐えきれなくなったのか、アクアは店から飛び出してしまった。

「フハハハハ！ぎまあみるがよい！」

「もう、バニルさんはあんまりアクア様をからかったらダメですよ！」

「いや、どうみてもトドメを刺したのは其方であると思うのだが……まあよい、そのの



「だって?」

「他の人に改めて言われると、私、今までカズマさんに抱きついたり膝枕したり凄いいことしてたなあって思い出して恥ずかしくなっちゃうの」

「!?……お、おう……ま、そんな事もあつたなあ……なんて……つまあ、昔の事だし!? 取り敢えず酒でも飲もうぜ!」

……くそ! 昨日といい今日といいなんだってコイツはこんなに俺のツボをついてくるんだ!

動揺していることを悟られないように、俺はアクアに酒を勧めると

「うん……じゃあ、ちよつとだけ飲むわね……」

恥ずかしがりながら、差し出されるジョッキを手にするアクア。

——そうだ、こういう小っ恥ずかしい事は、酒を飲んで酔って忘れるに限る。

「ぶっぴやひやはは！ねえカズマあ……もつと飲みなさいよお！ういー、ヒック……  
ねえこの私が飲めって言ってるのが聞こえないのお!？」

「こまでやれとは言ってない。」

「おい、帰る時に介抱するのは俺なんだからな？あんま飲みすぎんなよ……」

「にやあに言ってるのよお〜！飲めって言ったのはかじゅまさんの方でしょお〜？今日  
はまあだまだ飲むわよお!!」

ダメだこいつ。

さつきまでの可愛らしい女の子モードは何処に行ってしまったのだろうか。

こんなおっさんにドキドキしていた自分が恥ずかしい。

そんな事を考えていると、アクアの騒ぎを聞きつけたのか、いつの間にかギルド内の  
冒険者達がこちらに集まってきた。

「おお！流石アクアさん！いい飲みっぷりっすねえ！」

「今日は何杯までいくんすか!？」

「何杯でもいくわよ！店員さ〜ん！じゃんじゃん持ってきて〜！みんな、今日は私の奢  
りよ!!」

「「「「おおおおおおおおお!!!」」」」

……まあ、アクアにはこっちの方が似合うか。

諦めた俺は、ジョッキに手を伸ばし、宴に加わろうと……

「いやあ、アクアさん太っ腹っスわ! どうしたんスカ? なんかいい事でもあつたんスカ?」

「あ、それに気になります! 今日はいつにも増してご機嫌っスよね!」

「ふっふ〜ん! 仕方ないわねえ、今日は特別に教えてあげるわよ! 実はね! 私、カズマさんとキスしたの!」

ギルド内が一瞬で静寂に包まれる。

「それでね! 抱きしめて貰いながら可愛いって言ってもらったの!!」

シンと静まり返ったギルドの中、一人だけ頬に手を当ててイヤンイヤンと頭を振りながら嬉しそうにするアクア。



そして、真顔になった冒険者達はもちろん俺に視線を向けてくる。

——よし、この街から引越すか。

「あ、用事を思い出した！じゃあな、みんな！」

笑顔を作り180° ターンした俺はそのままギルドの出口へと——。

「おい、待てよカズマ」

行けずに肩を掴まれる。

振り返るとそこにはニヤニヤと下品な笑みを浮かべた冒険者達がいる。

「酒のつまみまで用意してくれるなんて流石カズマだなあ！喜べみんな！今日は朝まで

この話題で遊び倒すぞ！おら！もっと酒もってこい！！」

その後、朝まで根掘り葉掘り聞かれて散々冷やかされました。

ちなみにアクアは酔いが覚めるにつれて自分がどれだけ恥ずかしい事をしているのか分かり始め、最後には顔を真っ赤にして酒場から出ていき、しばらくの間屋敷に引きこもりましたとき。

## 続々・魔王討伐後の恋する乙女なアクア様

アクアが引きこもった。

引きこもったと言ってもまだ一日も経っていないのだが。

「で、どうしてアクアが泣いて引きこもったのか聞こうじゃないか」

「あそこまで死んだ目をしたアクアを見たのは初めてだったぞ。言い訳はあるんだろうな？」

そして、俺はというと現在正座で事情聴取中。

アクアが酒場から泣いて逃げ出した後、ほろ酔い気分で屋敷に帰ってきた俺は、アクアを泣かせたと勘違いしてガチギレしたためぐみんとダクネスによって叩き出された。

反撃しようとも思わないくらい怖かった。本当に怖かった。あそこまでキレた二人を見たのは初めてだった。

だが、よく考えたら勘違いで人を一晚中外に放り出すとはどういうことなのか。今回こちらには全く非はないというのに、勝手に決めつけやがって。

というか普段の行いを考えれば俺がそんな事をするはずがないとすぐわかるはずなのに、何故そうすぐに人を疑うのか。

そうだ、今回は俺は全く悪くないのだ。

俺は意を決して、逸らしていた目線を合わせて二人へと反撃する。

「お前ら俺が悪いと思ってるの？言つとくけど俺はアクセルの勇者カズマさんだよ？悪い事するように見える？……な、なんだよその目は！お、俺は今回悪くねーぞ！……まあ取り敢えず聞けよ……すみません、どうか聞きいてください」

二人からゴミをみるような目で見られ、堪らず土下座を敢行する。

あれ、俺ってこんなに弱かったっけ。

俺これでも魔王倒した勇者だよ？なんで女の子二人相手にビビってるの？

プライドの欠片もない土下座に毒気を抜かれたのか、顔を上げると二人はいつもの雰  
囲気に戻っていた。

どうやら話を聞いてくれるらしい。

「……まあ、そうですね。いくらカズマでもそこまでひどくはないはずです……多分」

「……そうだな、カズマにも少しは優しさというものがあるはずだ……多分」

おい、こつち見て話せよ。



事情を説明し終えると、二人は申し訳なきそうに俺に謝ってきた。

「すみません、てつきり私はやってきたアクアをペット扱いして寝床から追い払ったのかと……」

「ああ、私はアクアの好意を信じずに罠だと思い込んでギルドに言いふらしたのかと思っただぞ……」

「いくら俺でもそこまではしねえよ！」

しそうになつたけど。

そうして仲間からの信頼の低さに悲しむ中、めぐみんが意外そうに話しかけてきた。

「とうか、カズマがあつさりデレるなんて思ってもみませんでした。もつといつものようにツンデレっぷりを発揮するのかと思いましたがよ」

「ぶっ飛ばすぞ」

それを聞いたダクネスがうんうんと頷き

「それにアクアもアクアでそこまで初だとは、なんだか意外だな。なんとというかもつとこう、おおっぴらな感じだと思っっていたんだが」

「キス程度で顔真っ赤になるお前が言うな」

「!？」

カウンターを喰らって両手で顔を覆い震えるダクネスから視線をめぐみんに移し

「なあ、アクアはまだ出てこないのか？ アイツに説明してもらわないと明日からギルドのみんなにどんな顔して会えばいいのかわかんないんだけど。てか噂を聞きつけたアクシズ教徒に殺されそうなんだけど……」

「いくらアクシズ教徒でもそこまでは……いえ、やりそうな気が……？ ま、まあ、それよりもアクアです！ 食事の時間になっても降りてこないのですよ。いつものアクアなら何があっても食事の時には全て忘れているはずなんですが」

お前は女神様をなんだと思ってるんだ。いや確かにあつてるし俺もそういう認識だけれども。

「まあ、そういう事情があつたなら仕方ありませんね。では、アクアに外に出るように説得してきてくれませんか？ 私達では何を言っても聞いてくれませんでしたし、事情が事情なのでカズマが適任でしょう」

「……わかった」

立ち上がった俺は、アクアの部屋がある二階へと向かう。

笑顔で見送ってくれる二人だが、正直、真面目から向き合えない。

なぜなら魔王を倒す前、本気の告白をしてきたダクネスを振り、めぐみんとは凄いとをするという約束もしたのに、すぐに流されてしまつて合わす顔がないからだ。

俺だつて、二人の気持ちを蔑ろにしてアクアに迫つたわけじゃない。

これは完全に言い訳になるが、アクアを異性として見るようになる、あそこまで歯止めがきかなくなるのは、自分でも予想外だったのだ。

俺は、一体どうしたらいいのだろうか。

もちろん、ハーレムをつくれる甲斐性なんてない。

やはり、こういつたことは三人に一度相談した方が――。

「……………ついたか」

考えているうちに、いつの間にかアクアの部屋の前についていた。

そうだ、とりあえずアクアを部屋から出さないと話にならない。

まずは目先の問題からだ。これは決して逃げてゐるわけじゃない。

俺はドアにノックをしてアクアに呼びかけた。

「おーいアクア。出てこーい」

.....

へんじがない。ただのひきこもりのようだ。

「おい、いるんだろ。出てこいよ。みんな心配してるんだぞ」

『.....嫌』

返事が返ってきたと思ったらたったの二文字。

こいつ、そんなに落ち込んでるのか。

「そんな事言つてないでさっさと出てこい。ほら、飯食べるぞ」

『.....もうお外にいけない』

いやお前のせいで俺も出れないんですけど。

.....ここは一つ、モノで釣ってみるか。

いや、いくらコイツが馬鹿でも流星にこんな初歩的な罠にはかからないだろうけれど、一応やってみよう。

「めぐみんとダクネスには事情を話したからさ、とりあえず下に行こうぜ？お前のためになんぞわざわざ高級酒まで買ってきたんだからな」

『ほんと!?待っててね、すぐ着替え.....あ』



おい。

「お前なめてんのか！お前のせいで俺は恥ずかしくて外も出歩けねーんだよ！ムダに心配かけさせやがって、モノに釣られくらいならとつと出てこい！引きこもったフリなんてしてんじゃねー！」

本当はそこまで落ち込んでいなかった事に気づいた俺は、さつきまでと打って変わって借金取りの様にばんばんドアを叩く。

『いやー！嫌よー！というかなんでヒキニートのカズマに外に出るとか言われないといけないのよ！』

ドアを無理やり開こうとするも、向こうから強い力で押さえつけられていてどうにも開きそうにない。

こいつ！さつきまで真剣に悩んでいた俺の気も知らないで……！

「ふざけんな！今は別にニートじゃねえし！魔王を倒してお務め果たしたからやる事がないだけだ！というか俺の事をニート呼ばわりする癖にお前だつてすぐに怠けるわ冬は暖炉から一步も動かないわで俺を馬鹿にできないくらいヒキニート体質だろうが！」

『ああー！女神に向かつてヒキニート体質とか言った！謝つて！女神にヒキニートとか言ったことを謝つて！それに落ち込んだのは嘘じゃないのに！さつき喜んだのは、モ

ノに釣られたんじゃないかと、カズマさんが私の事を心配してプレゼントを買ってきてくれた事が嬉しくてつい………ってわあああああ！今のナシ！アンタ私に何言わせてんの!? バカなの、ねえバカなの!? もうやだ！実家に帰らせていただきます!」

「何ひとりで漫才してんだ! いいから開けろ! この!」

くそ! ビクともしない!

こんな時は自分の低いステータスが本当に憎らしい。

「ていうか何で俺が悪いみたいになつてんだよ! 勝手に自爆して引きこもつたお前が悪い………おい待て、そういや最後なんつた!? 実家つて………お前まさか!」

嫌な予感を覚えた俺は、ドアが壊れるのも構わず、ウィンドブレスで吹き飛ばした。

すると、中にもぬけの殻。

「やつぱり! アイツ天界に逃げやがったな!」



私の名はエリス。この世界でモンスターと戦い、惜しくも命を落とした方々を導く存在。

今日も、何人もの冒険者を新たな人生へと案内したところだ。

人が死ぬのは人生において基本的に一度きり。

なので、ここに来る人達とは殆どが初対面で、そして二度と会うことは無い。

なのだが……

「あの……先輩。そんなに簡単に遊びにこないでください……」

目の前には、私の先輩である水の女神アクアが椅子に腰掛けている。

魔王を討伐して以降、天界に帰ってくるのが認められた先輩は天界と下界を自由に行き来できるようになり、この場所にも簡単に来れるようになった。

しかし、ここは死者の魂を扱う厳格な場所。他の神々ですら余程の事情がない限り来ないもの。

まったく、お仲間のカズマさんといい、ここは遊び場ではないというのにどうして気軽にきてしまうのだろうか。

この前のカズマさんは、ハーレム発言で追い出されたからここに来るといふ、何とも微妙な理由で遊びにこられたのだが、一体先輩はどうしたのか。

そうやって私が悩んでいると、いつもと比べてどこことなく元気のなさそうな先輩が、理由を話し始めた。

「……ごめんね？ 私もあんまり来ちゃダメなのはわかってはいるんだけど、カズマさんか

ら逃げるにはもうこれしか方法がなかったの。少しでもここにいさせて？」

「それは構いませんが、一体何があったのですか？先輩がここに来る以外逃げ道がなかったなんて余程の事だと思うのですが……」

困り顔で頼んでくる先輩はいつになく珍しく、つい興味が湧いて深く聞いてしまった。

すると、

「私もちょうどエリスに聞いて欲しいかつた事があるの。ここに来たのはそれも目的の一つだもの」

意外な事に、先輩は逆に聞いて欲しいと言ってきた。

てつきり怒られると思っていたので、驚きと同時に自分が頼られている事を感じ、なんだか嬉しく思う。

「構いませんよ。私で力になれるのなら、喜んでお聞きします！」

私が聞く姿勢にはいると、先輩は下を向いてモゴモゴと小声で話し始めた。

「えつと……エリスに聞いて欲しいのは、その、カズマさんの事なんだけど……」

「すみません、できればもう少し大きめの声で喋って頂かないと聞き取りにくいのですか……」

「えっ!?……うう……エリスのいじわる！」

私がそう言うと、先輩は耳を真っ赤にしながら睨んできた。

意地悪をするつもりなどなかったのだが、どうやら先輩がこれから話すのは余程恥ずかしい事らしい。

覚悟を決めた先輩は、涙目になりながらも先程より大きな声で話し始めた。

「実はね、私ね、カズマさんの事、最近す、好きだなあって思ったりしてね?……あーべ、別に私からそう思ったわけじゃなくて、この前からカズマさんが私にアタックしてくるから、多少揺らいでるだけなんだけどね!」

そう言って、どこかの勇者様のようなツンデレを發揮する先輩。

「どうやら、話したい事というのはカズマさんに対する自分の気持ちの事だったらしい。」

「ふふ、カズマさんたら女神に迫ろうだなんてとんだ罰当たりよね!慈悲深い私じゃなかったら天罰を食らわしてるところだわ!まったく、今度迫ってきた時はどうしてやろうかしら!」

ものすごく嬉しそうな顔で報告してくる先輩にどう反応するか困るが、他の人にこんな言い方をして傷が広がる前にここは正直に言った方がいいだろう。

「あの……すみません先輩。実は私、この前下界を覗いた時に嬉しそうにカズマさんの寢床に向かう先輩を見てしまったんです……」

「えっ」

私の台詞を聞いて固まる先輩。

「それに、この前カズマさんが来た時に先輩がハーレム発言に嫉妬していたと仰つていたので、先輩がカズマさんに恋愛感情を抱いているのは既に知って………っ!? わ、わあっ!? 先輩、掴みかかつてこないで下さい! パッドを取ろうとしないでください!! や、やめてえ!」

「わあああああ!! エリスのバカ! エリスのバカあああああ!!」



「……………もう、いじわるしない?」

「元から意地悪なんてするつもりはありませんよ! ……でも得意げな先輩が可愛らしくてつい………って嘘です! 今のは冗談ですので私の胸に向かって手を伸ばさないでください!」

あの後拗ねた先輩の機嫌を直すのはかなり大変だった。

余程恥ずかしかったのだろう。

「まったく、みんなして私のことからかうんだから……もうこの際ぶっちゃけるわよ。私はカズマの事がす、好きよ！……それで話はそれちやつたけど、エリスに相談したいことっていうのはね」

そう言つて佇まいを直し、真剣な表情になつた先輩は

「私つて、カズマと一緒にの人生を歩めると思う？」

少し、悲しそうな雰囲気を漂わせながら問いかけてきた。

一緒にの人生。という神の身である先輩が、人であるカズマさんと寄り添えるのかという事だろうか。

「……そう、ですね。昔の神話などに登場する神々の中には人と結ばれた御方もいるらしいです。ですので、本人達の気持ち次第だと私は思います……」

私は恋愛をした事がまだないので、前例を語る事しかできないしかなのだが、前例と照らし合わせると可能ではあるはず。

更に、カズマさんは魔王を倒した勇者で、生きる伝説となつてもおかしくない人。神と結ばれる資格は十分にあると思う。

しかし、先輩は首を振り。

「違うの。気持ち的な問題じゃないのよ。私はもう何があってもカズマの側を離れるつもりは無いわ。でも、私達神と違って人はすぐに歳をとってしまふものでしょう？今は馬鹿なことやってるカズマさんでも、いつかは大人になって、年老いて、死んでしまうの。カズマさんだけじゃないわ。めぐみんもダクネスも、私の大切な仲間は、百年後にはみんななくなってしまうの……」

寿命。それは誰もが抗えない運命で、それは私達でも勝手に変えることは出来ないもの。

なおも先輩は続ける。

「だから、今こうやって楽しく過ごせてる毎日も、時間が経てば、私は、一人になって……グスツ……せつかく、大切な仲間と、好きな人を見つucker事ができたのに……わ、わたし……それが、こわ、くて……う、ううう……」

私は、途中で涙を零し始めた先輩を抱きしめた。

胸の中で泣く先輩は、いつものいぎと言う時は頼りになる先輩と違って、か弱い普通の女の子に見える。

「先輩。残念ですがそれはどうにもできません」

「ッー」



私は、残酷だと思いつつも事実を告げた。

「先輩だけじゃなくて、カズマさんも、めぐみんさんも、ダクネスも、きつと先輩とずつと一緒にいたいと思っただけです。でも、その夢は叶えられません。寿命は、誰にだってどうしようもできないものなんです」

「……………」

「ですので、せめて、一緒にいられる時間を精一杯楽しんで下さい。私にはそれしか言えません」

「……………そう、よね」

自分でも酷いことを言っていると思う。

けれど、これはいつか先輩が受け入れないといけない事なのだ。

暫く泣いた後、先輩は顔を上げ私から離れた。

「……………すみません、私なんか、偉そうなことを言ってしまった……………」

「ううん。ありがとう、エリス。アンタのおかげでスッキリできたわ。そうよね、いくらなんでもさっきのは我が儘過ぎたわよね」

目を赤く腫らしながら笑顔を浮かべる先輩に、何もしてあげられない事がとても悔しい。

自分は、少しでも力になれただろうか。

「あの……私に出来ることがあれば……」

「……じゃあ、もう少しここにいさせて？今、カズマ達に会ったら泣いちゃいそうだから、ここで気持ちの整理をさせて欲しいの」

「……は、はい！やっぱり先輩には笑顔が似合いますよ！私も、先輩が笑顔でいられるように天界からさりげなくお手伝いを」

「ちーつす！エリスさまー！ウチの駄女神を迎えに来ましたー！」

「えっ」

突然の声に驚いた私達が後ろを振り返ると、そこには最悪のタイミングでテレポートをして来たカズマさんがいた。

「……………うー……………あう……………え……………！」

「か、カズマさん！もう、どうして来たんですか！」

「えっ!?なんで!?どうしていきなり怒られてるんですか!?俺、気づかないうちにエリス様にまたセクハラでもしましたっけ!？」

「さ、されてません！そうじゃなくてですね、何とも間が悪いと言いますか、さつきまで私と先輩は貴方について……………先輩?」

「ん？おいアクア、一体どうし」

「わああああああああ!!!かじゆましやん!かじゆましやああああん!!!」

突然のカズマさんの登場に、わなわなと震えていた先輩は、我慢出来なくなったのか、再び泣きながらカズマさんに抱きついた。

「う、うおっ!?!お前急にどうしたんだよ!?!」

「カズマさん!カズマさん!私、もう絶対にカズマさんから離れたりしないからね!カズマさんがどこに行ってもずっとついて行くからねっ?ねっ?」

「家出したと思ったらストーリーカーみたいになって帰ってくんよ!こ、こらっ!とりあえず離せ、このバカ!」

「いやー!離すとカズマさんが何処かに行っちゃうかもしれないんだもん!」

「何言ってるんだかお前!い、今更お前捨てて何処かに行くわけねーだろうが!ほら!離せ!」

「え……あ……うん……えへへ……」

なんだろう、ここは私の居場所のはずなのに凄く居づらいのはなんだろう。

「つたく……すみません、エリス様。コイツがお世話になりました。後でエリス様の邪魔をしないようにこっぴどく叱っておきますんで」

そのセリフはカズマさんが言えたことなのだろうか……

先輩の頭を無理やり下げさせるカズマさんに対し、苦笑を浮かべる。

しかし、いつ見てもこのお二方の仲の良さには敵わないな、と思いきらされる。

それに

「おいアクア。別にテレポートには腕を組む必要なんてないんだぞ。はやくほど……ほど……やっぱり解かなくていいです」

「ふふん、ようやくカズマも素直になってきたわね」

カズマさんの反応を見ると、先輩にはこの先何十年も明るい未来が待っているのがひと目でわかる。

この人に任せておけば、きっと先輩は別れの時が来たとしても、悔いの残らない日々を送れることだろう。

テレポートの準備をし始めた二人に向け

「それではカズマさん、先輩、いつてらっしゃいませ。そして——」

二人に私に出来ることはただ一つ。

それは幸運の女神として、二人の幸せを願うこと。

私は彼に手をかざし、心の底からの祈りを捧げた——！

「『祝福を！』」